

横顔
就任インタビュー



安心と満足を与える 急性期医療の中核へ

1965年に80床で設立され、今では217床の地域医療支援病院へと発展した北摂総合病院。2025年、60周年を迎えた同院の第5代病院長に就任した植田直樹氏は、救急医療の強化や広報活動に力を入れている。

社会医療法人仙養会 北摂総合病院

う え だ な お き

植田 直樹 病院長

1987年大阪医科大学(現:大阪医科大学)医学部卒業。同大学整形外科教室講師、北摂総合病院副院長、同病院長代理などを経て、2025年から現職。

社会医療法人仙養会 北摂総合病院
大阪府高槻市北柳川町6-24 ☎072-696-2121(代表)
<https://www.hokusetsu-hp.jp/>

登録医との連携で 地域医療を支える

北摂総合病院は、大阪府北部の高槻市と近隣の茨木市や摂津市など北摂地域の急性期医療の中核を担う。循環器内科、消化器内科、整形外科などを中心に約30診療科を展開する。

大阪府から地域医療支援

病院、大阪府がん診療拠点病院の承認を受け、24時間体制での救急医療に力を入れてきた。

植田氏は「当院の伝統良さを継承しながら、時代の変化に即した変革をし、職員一丸となり、最高の医療を実施し地域の人々に安心と満足を与える『VERY BEST HOSPITAL』

AL(最高の病院)」を目指したい」と抱負を語る。

1997年に地域医療連絡室(現:地域医療連携室)を設置、メディカルソーシャルワーカーを中心に地域の約400人の登録医との連携を強化してきた。登録医からの紹介も積極的に受け入れており、症状の安定した患者は登録医へ逆紹介

している。「今後も登録医や他職種との連携を深め、患者に寄り添ったきめ細かな医療・介護・福祉サービスを提供していきたい」

だが全国的に病院経営が厳しい状況にある今、そのかじ取りは楽ではない。主要診療科の強化、病床管理の効率化、サービスの向上により、持続可能な病院経営を目指している。

「今後は高齢者の増加を見据え、高齢者医療ができる地域包括医療病棟の設置や病院総合医の導入、認知症専門の看護師を配置した外来の開設も考えています」

スマホを導入して 業務の効率化へ

病院経営では各部署の連携を深め、ガバナンスを強化。コンプライアンスの効いた病院経営を目指し、そのための意識改革に取り組んでいく。医療スタッフの確保がますます難しくなる中、離職防止のための職場環境の改善も重要課題だ。

「一番大事なことは、スタッフがどんな意見でも遠慮なく出せるような『心理的安全性』を確保することです」。自らスタッフと交流を深め、現場の声を吸い上げ、改善していくつもりだ。業務効率化の一環としてデジタルトランスフォーメーション(DX)も推進。2025年11月からスマートフォンを導入、看護師が

チャットで疑問などを医師に聞き、患者の状況や医療データを電子カルテに入力できるようにする。「看護師の業務効率化、時間外労働の削減を期待しています。将来的にはAIを駆使して最新情報を入手し、臨床に役立てたいと考えています」

SNSを駆使した 広報活動を推進

職員の働き方改革も大きな課題だ。医師や看護師の負担を減らし、業務に専念してもらうため、20年から救急救命士の雇用を始め、現在は5人が勤務。スムーズな救急搬送の受け入れが可能になった。

しかし、17年間、急性期医療の一翼を担ってきた救急車両が老朽化したため、新しい救急車の購入費を募るクラウドファンディングに、25年12月26日まで挑戦中である。

「この取り組みは地域で24時間365日体制の救急医療を担ってきた当院のことを、より幅広く知っていただくことが大きな目的です」。このように広報活動に力を入れており、従来のインスタグラムに加え、新たに公式ラインの運用を始め、地域の高齢者への健康教室の案内などに活用している。「これからも地域とのつながりを深め、地域にも職員にも愛される病院であり続けたいですね」